

浄土

1978-10

昭和十年五月二十日 (第三種郵便物認可) 毎月一回一日発行
昭和二十四年四月二十八日 運輸省 (特別郵便特許第225号)
昭和五十三年九月二十五日印刷 昭和五十三年十月一日発行
第四十四卷 第十号



自然再考

——実りある人生のために——

通勤途次、ひさしぶりに降雨中のドライブをたのしんだ。雨天の折の運転は、スリッパや視界の関係で危険きわまりなく、たのしん

合であつても、それを痛快にさせるかのよう
な、ひさしぶりの雨だった。ワイバーのきし
む音も快い。文字通り旱天の慈雨を受けたこ
とになる。

今夏、全国各地とも異常な暑さを被った。

雨なしの日が続き、それは覚悟していた以上の記録的な暑さであつた。必然的に水の消費量は増え、北九州地方を皮切りに、水不足は全国的に波及し、ともに不自由な生活を余儀なくされた。

そして今、水不足の最中に、自嘲気味に吐露された、若い母親の言葉が印象に残る。

「子供が、蛇口を回しても水が出ないというんです。出るのが当然だと考えている訳です。すべてが人口的な生活では、こう考えても無理ありません。悲しいことです」

自然環境豊かな中で生れ育った、地方出身

だ、といえは語弊があるかもしれない。現に私も、降雨時には速度を二割減にして走行するよう心がけている。

だが、走行には不都

のこの母親にとって、わが子との会話は、確かにショックであつたようだ。
厳しい自然との戦いの中から取捨選択し、営々と築きあげてきた生活エリア。その中にあつて、世代によって異なった見解が生じてきている。ありがたいと受けとる壮老年層に
対し、当り前とする少青年層。この相異は、相互の年齢以上のものがあると思えてならない。生活環境の変化からくる相異であるとい
つてしまえばそれまでであるが、神秘的なま
でに無限な自然界の力を、改めて見直さねばなるまい。

科学万能と錯覚した生活ほど危険なものはないし、どんなにか文化的な生活を送つてい
ると思つていても、それは虚無にすぎない。
自然界と共存して生きゆくことこそ、真の生活ぶりといえよう。

好季、秋を迎え、仕事、運動、行楽など、なすことすべてを爽快にし得る時節を与えられた。この季節を、ただ甘受することなく、菊の大輪が咲き競い、黄金の稲穂が重く実を結ぶように、しっかり大地に根ざした、実りある人生を送りたいものだ。（長谷川宣丈）



|| 十月号 ||



罪業のおもき事は石のこくとく
なれとも、本願のふねにのり
ぬれは生死のうみにしつむ事
なく、かならず往生する也

——『十二箇条の問答』

目 次

法 話

お十夜を迎えて……………吉 川 哲 雄……(2)

日本仏教の分水嶺 法然上人……………坪 井 俊 映……(6)

<ふるさと紀行>五重のわかれ……………竹 田 英 宣……(20)

<民話シリーズ>鬼面の鳥……………谷 川 のぶ也……(23)

自然を考える⑦<芸術と自然>

月に想う≡中国の印象≡……………森 爽 ……(10)

自然の恵みの中で—仏教美術の背景—……………金 子 良 運 ……(15)

江戸後期の宗門歌人

良洗上人の研究(二)……………吉 田 光 覚……(32)

浄土句集……………一 田 牛 畝 遇……(28)

<読者の声>信仰への道

『無量寿経』に説かれていること(一)……………吉 村 孝……(30)

<表紙裏・巻頭言> 自然再考……………長谷川 宣 丈

念仏ひじり三国志④ —法然をめぐる人々……………寺 内 大 吉……(37)

表紙 久住静雄画

カット 大正大学美術部



お十夜を迎えて

よし かわ てつ ゆう
吉 川 哲 雄

(大本山光明寺執事長
横浜・旭区三仏寺住職)

菜畑を通してくれる十夜かな

一茶

人声の小寺にあまる十夜かな

召波

―山の寺の鐘が聞える。双盤念仏が始まったのだ。早く早く、ご免なさいよ。一寸近道通らしてもらいますよ。―春の頃黄一色であった菜畑も今はすっかり収穫もすんで黒土に静まり返っている。その畑の中の細道を孫の手を引いた老婆が寺へと急いでいる。今日ばかりは畑の持主もだまって通してくれる。一茶はこんな田舎の寺の十夜風景を詠んだのではなからうか？ そしてその山

の小寺からは今日一日野良仕事を休んだ村人たちがけんちん汁をすすりながらの四方山話の高声が堂内からあふれてくる。

かつてはこのような十夜風景が各所で見られたものであるが、今や全国的に都市化が進んでこういった田園風景がだんだん少なくなって来ました。然し忘れられたように処々に残された田畑は今たわわな実りの秋を迎えて居ります。この爽やかな季節、自然の稔りと共に心の実りを頂く十夜法要こそ吾々浄土宗徒のみに戴く法悦でありましょう。

古都鎌倉のとり澄ました顔の中で、各宗寺院では年間

各種の仏教行事が修せられて居りますが、光明寺の十夜法要だけは土の香の豊かな法要であります。十月十二日もなれば材木座の通りには関東各地から集った植木屋が処狭しそれぞれ自慢の植木を並べ始める。十三日を迎えると、大門通りのバス停から総門へ、総門から三門へ、更に大殿前へと、長い参道を農具、玩具、たこ焼、綿菓子等あらゆる店が両側に屋台を並べる（数年前まではテント張りの見世物小屋が設けられた）。山門の中からは双盤念仏が聞えてくる。夕闇せまる頃ともなれば、あかあかと電灯のともされた参道の石畳は、善男善女でふくまれる。大殿の中からは礼讃舞の詠歌が流れてくる。然しこのざわめいた参詣者の群も、大殿の前に達すると老若男女の区別なく、鰐口を鳴らし、しばし冥黙合掌して再び雑踏の流れの中に吸い込まれて行く。これが夜の光明寺十夜風景であります。

然し一夜明けて十四日の日中ともなれば、唱導師による日中法要が古式により厳肅な中に修せられます。神奈川教区二百六十カ寺の中から推された唱導師が紫の名旗を先頭に、詠歌講、稚子、楽師、式衆、法縁寺院住職等の警護のもと、その行列が九品寺を出発し、二百米以上

の長きに亘って肅々と歩を進める。更に近年この行列に一層の色彩を添えるのは、教区浄土宗寺院の青年僧が網代傘に黒衣、白の手甲、脚絆、草鞋ばきの求道姿にて、七百三十余年前開山良忠上人が錫をこの地に進められたかとも思われる様で、念仏行進としてこの行列に参加されることあります。街中の人々も思わず合掌し、頭を垂れる姿が各所に見られることは尊くも有難いことあります。この行列が漸く大殿前に到着するや、開山堂に於て大僧正よりお代理としての弘子の授与を受けた唱導師は、参詣者によって満堂立錫の余地のない大殿にと歩を進め、いよいよ光明寺所伝の古式による法要が修せられます。一時間余に亘るこの法要の圧巻とも云うべきものは、引声念仏、引声阿弥陀経による双盤行道であります。千に近い満堂の参詣者も咳払い一つなく、この荘厳な行道の宗教的雰囲気の中に溶け込んで居り、紋服袴に威儀を正した老翁が打ち鳴らす鉦鼓を響きは、或いは高く或いは低く、強弱緩急宜しきを得、静かに目を閉じれば極楽の七宝池に八功德水の漂う思いがいたします。かつて私が唱導師を勤めさせて頂いた折参詣したある中学校長の知友が、その感激を次のように詠じて後日送って

くれました。

ここだけの僧はならびて堂めぐる

引声念仏引声阿弥陀經

きらびなる僧は古式に堂めぐり

鉦鼓に和しつ念仏とよみ

さてこの十夜の語源であります、浄土宗の拠り所とする三部の經典の中の『無量壽經』の中に、このように書かれた一節があります。「ここに於て善を修すること十日十夜すれば、他方諸仏の国土に於て善をなすこと千歳するにまされり」。この意味は言葉通り、人間娑婆世界に於て十日十夜善事を行うことは、仏様の浄土に於て千年善を為すことよりもすぐれていると云う意であります。更に經典は言葉を續けて「他方諸仏の国土に於ては善を為す者多く、惡を為す者少し。福德自然にして造惡なき地なり」と述べて居ります。ここから十夜の言葉は発して居ります。仏の国土の清浄なことは『阿弥陀經』

の中に「彼の仏の国土には三惡道の名もなし。いかに況や実あらんや」と説かれ、吾々が欣求する浄土には惡と云う名さえないのであるからまして惡の実体がある筈がないことを示されて居ります。

さてこの經典に説かれたお十夜の意味するものから現代社会の様相を考えて見る時、真に感無量なものがありません。現在私たちが生きている社会はどのようなものでありましょうか？ 誠に末法の世と云うべきでしょう。物に榮えて心に亡びる世、仏の教はあるがこれを行ずる者は少なく、まして証の果を得る者はありません。經濟は成長し物は豊かになったとは云うものの、それより生ずる公害、薬害の問題、生命の尊重が声を大にして叫ばれている一面、天災、人災による多数生命の損失、まして革命的暴力による罪なき民衆の無差別殺人等、朝に夕に新聞、テレビに報道されるものを見聞する時、人間社会の将来はどのようなのであるのかと心の痛む日々であります。このような世の中であるだけに一寸した善事でも心あたたまる思いがいたします。

私たちの願う所は明るく、正しく、和やかな国土、即ち三宝成就の仏国土の建立にあります。然し完全無欠の

浄土をこの世に築き上げることとは到底不可能なことであります。だからと云って放任してよいものでありましようか？ 少しでも之に近づくよう努力することが人間に生れた甲斐というものでありましよう。釈尊は縁起の道理を示されました。私たちは一人で生きて行くことは出来ません。お互様の世の中にあります。それ故善ということも悪ということも、人と人との間に於て考えられることでもあります。そして最も大切なことは相手の気持に立つてものを考えることから出発することでありましよう。六波羅蜜の第一に布施の説かれて居ることを見ても了解される所であります。然し実際は如何でありましようか？ 世の中には学力もあり、財力もあり、ものの道理をわきまえている人は多くありますが、勇氣をもって一つの善事を行う者は極めて稀であります。職場に於て、電車の中に於て、私たちは度々痛感いたす所であります。真に『無量寿経』の言葉通り、この土に於て善を修すること極めて難しであります。

この穢土の実相、そしてこの土を構成する人間の実態、「諸悪莫作衆善奉行」の片鱗さえ行い得ぬ人間の悲しき宿業を、宗祖法然上人はご自身の問題としてとら

え、悩んで来られました。「わがこの身は戒行に於て一戒をも保たず、禪定に於て一つもこれを得ず」と涙され、嘆きなげき経蔵に入り、悲しみ悲しみ聖經に向って真実なるもの、至差なるものを求めに求めて来られました。智慧第一の法然上人に於てさえ然りであります。まして我等凡愚の者に於ておや。宗祖は遂にその至善なるものを善導大師の『観経疏』の、「一心に専ら弥陀の名号を念じ行住坐臥に時節の久近を問わず、念々に捨てざるものこれを正定の業と名づく、彼の仏の願に順ずるが故に」の文の中に於て見出されたのであります。即ち宗祖は念仏の中に阿弥陀仏の万行万差の円満なる果徳を、そして名号の中に万徳然漏の一切の功德を発見いたされました。

このように、善を修すること極めて困難なこの現代社会に生きる者として、我々はこのお十夜の意味する所のものを再認識して、宗祖法然上人が高祖善導大師によって開顕された本願念仏の一行に徹することこそ、お十夜を迎えるにあたって深く心に銘記すべきことと存じます。

日本仏数の分水嶺

法然上人



坪井俊映

(仏教大学教授)

一

日本の仏教は、法然上人が念仏一行による浄土往生説を提唱して、浄土宗を開創したことによって大きく転回している。法然上人以前の仏教、即ち南都大宗(法相、華嚴、三論、俱舍、成実、律の各宗)および平安の二宗(天台、真言の両宗)は、いずれも国家仏教であり、民族の仏教であって、国家の安寧、皇族貴族民族一門の繁栄を願う仏

教であった。

奈良時代における聖武天皇による諸国における国分寺の建立、伝教大師最澄による大乘戒壇建立による大乘菩薩僧の養成はいうまでもなく、真言密教の加持祈禱等はいずれも国家の安寧と皇族貴族氏族一門の繁栄を願うための仏教であった。平安時代に加持祈禱がさかに行なわれ、密教(東密、台密)が社会の指導階級にひろく信奉されたのも現世の安寧を祈願する仏教であったからである。これに反して、これら皇族貴族等の指導階級に仕

え、その地位と生活をささえた一般民衆は仏教の恩恵にあづかることはなかったのである。

かの、京都宇治平等院鳳凰堂は貴族藤原道長の子、頼通の建立になるところといわれ、優れた浄土教建築物であつて、その当時は、現世における極楽浄土と思われるほど荘厳華麗を極めたものであつた。この鳳凰堂において行なわれる荘重な宗教儀式に参加できるものは藤原氏一門のものであつて、土を堀り、柱を削り、石を運んだ一般民衆は、身分が異なるために荘重な儀式に参加することはできないのである。

藤原貴族一門のものは、この立派な建物において行なわれる荘重な儀式に参加して、法悦に浸り、この世の極楽浄土にある思いに満足したのであらう。しかし、一般の民衆は身分の相違によつて、儀式には参加できず、法悦の境に入ることはできないのである。このことは、指導階級である藤原一族のものは救済されるが、身分の違う一般民衆は救済されないことを物語るものである。

かかる身分の垣を撤廃して、貴族も一般民衆も、老若男女を問わず、すべて仏の前においては平等であり、凡夫であるとして、簡単な口称念仏の一行によつて、平等

に救済される教えを説いたのは法然上人である。そして、法然上人は自身の説く念仏一行による平等往生説の根拠を中国の善導大師の教えに求めたのである。

二

このように、身分の差別を撤廃して、仏教をひろく民衆に開効した上人の教えは、当時の民衆には喜ばれたが、しかし、その反面、旧仏教より妬みをうけることになり「法然房は智慧深遠ないれども、いささか偏執のきらいあり」という批判があびせられ、また、晩年、南都の仏教者より法然上人の善導大師に対する考え方に誤りがあると指摘して、念仏禁止運動がおこつたのである。

これらの批判非難は旧仏教よりおこつたものであるが、さらに注目すべきことは、法然上人以後、中国より伝えられた栄西の臨済宗、道元の曹洞宗及び日蓮の日蓮宗等は、いずれも法然上人の説かれた念仏を批評し、それによつて自身の説く宗派の教説の特色をあきらかにしていることである。

栄西は法然上人と同時代の後輩であつて、直接、法然

上人の念仏を批判したところは見出されないが、法然上人が説かれる末法時における戒法輕視説に対して「汝は、文字言語の塊を遂うて、永くみづから持戒修禪の人のあるを忘れたるなり」といって批判している。しかし、榮西は法然と同じく機教相応という立場に立って、仏教八万四千の教行の中より、持戒修禪の一法一行を選択しているのである。

また、道元は『正法眼藏』において、念仏をもって蛙の声に比して、「口声をひまなくせる春の田の、かへるの昼夜になくがごとし、つひに又益なし」といい、念仏の易行易修についても、「世法にあらず、仏法にあらず、凡夫迷妄のはなはだしいもの」といっているが、しかし、法然が念仏の一行一法を選取したと同じく、只管打坐の一行を説いているのである。

さらに、日蓮に至っては、法然上人と対決することによって、自身の教えの特質をあきらかにせんとしているのであって、「念仏を無間地獄」の業なりといつて、厳しく難語しているが、日蓮の考えによると『法華經』こそ末法今時に広宣流布すべきときであり、『法華經』の要は題目にあるとして、唱題成仏の一法一行を説いてい

るのである。

このように、法然上人以後に、あらたに起った臨済宗、曹洞宗、日蓮宗はいずれも何等かの形において法然の念仏を批評非難しているが、しかし、法然の念仏を批判することによって、自身の説く教説の特質をあきらかにせんとしていることは注目すべきことである。そして、さらに、それぞれ自身の奉ずる教えをもって最高のものとするばかりでなく、時機相応の教えとして、八万四千の教行の中より一法一行を選取していることは、法然の念仏一行選取と同じ思考形態であつて、選取する内容において異なりはあるが、法然と同じ選取の論理によっていることはいふまでもない。

もし、法然の出世がなければ、鎌倉の新仏教(臨済宗、曹洞宗、日蓮宗)はおそらく一法一行を説く宗派として成立したかどうか疑がわしい。

三

このように鎌倉時代におこった新宗派は、平安時代の仏教が雑行雑修の仏教であるに対して、一法一行を選取

して時機相応の教えとするのであって、かかる考えの先驅者は法然上人であり、しかも上人と同じ思考をもつて、特異な一法一行を選取している。そして、法然上人の念仏を批判し、雑詰することによって、自身の説く教説の特色をあきらかにしているのである。

法然上人の浄土開宗によって、日本仏教が大きく転回し、その分岐点となり、分水嶺の地位にあるのが、法然上人であるとは、かかる処よりいうのである。

したがって、法然上人は単に浄土一宗の開祖であるばかりでなく、また念仏諸宗派の祖であることはいうまでもないが、日本仏教の転回者であり、鎌倉新仏教（浄土、禪、日蓮）創唱の先驅者であり、創唱の原動力となった人である。

かつて、一部の識者によって「大法然」なることがいわれたが、法然上人がいかなる意味において、「大法然」であったかは遺憾ながら耳に止めることが出来なかったが、上述のごとく、法然上人が日本仏教の転回者であり、その先驅者、原動力となった人であると見るならば、単に一宗派を開創した宗祖という小さい法然上人ではなく、「鎌倉新仏教創唱の原動力となった大法然」と

して、もう一度見なおさなければならぬであろう。

しかるに、近年、多くの学匠によって、鎌倉仏教、とくに法然、親鸞の研究がさかんに行なわれるようになって、その中、主として親鸞聖人の門流の人々より、「日本における庶民浄土教の大成者は親鸞にある」とし、法然上人はそれに至るまでの過渡期の人であり、したがって、その教説では矛盾、不完全、不徹底なものがあるとして、ことさらに法然上人を過少に評価せんとする考えのあるのは如何なるものであろうか。

法然上人の出現なくして、親鸞聖人の念仏が生まれないうのはいうまでもない。親鸞の考えが真に彼のいうごとく、法然の教えを忠実に伝えたものか、彼によって歪曲されていないか等は、大乘仏教の根本義に立って批判し研究されねばならない。しかし、上述したとき、法然上人に対する批判が一般化して親鸞を偉大化するため、法然を過少視せんとするのは如何がなものである。新日本仏教を生む原動力となったのが、法然上人の念仏往生説である。日本仏教の分水嶺的地位にある法然浄土の特質、価値を明確にすべき、大きな課題が今なお残されていると考えるのである。

自然を考える

(七)

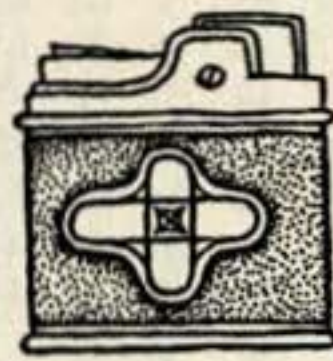
— 芸術と自然 —

月に想う

“中国の印象”

九月に入ると、急に涼しくなり、真夏日五十余日という記録的な暑さも嘘のように秋が身近にあることを感じるようになった。

秋を迎えると、来年度のリサイタルに備えて舞踊の創作に入るのが例年の事となる。あれこれおもいを凝らして想を練る。創作するという作業は芸術を志す者の生甲斐でもあり、魂の源泉でありるのが時に生みの苦しみに身を切るおもいをするのも常である。



もり 森

たかし 爽 (爽海)

(月影会舞踊学院院长
浄土宗芸術家協会常任理事
横浜・港北区浄流寺住職)

静かに秋の夜長、上弦の月を眺めつつ構想到に耽ける。その想念の中にやはり今夏訪れた中国の印象が強くよみがえって来るのである。

○ ○ ○

去る六月下旬から七月上旬にかけて筆者は日中友好幼児教育関係者訪中団長として上海・武漢・鄭州、開封・北京等の五都市を訪問したのであった。



—万里の長城と筆者—

街は人々で溢れていた。しかし街頭に大人は溢れていても子どもの姿は見当らない。何故だろう？ 訪中して最初に抱いた疑問点であった。すぐに中国国際旅行総社の工作員兼通訳に聞いてみようかと思ったが、何れはわかることだろうから自分で解答が見出せるまでまってみようと考えたのである。

○ 中国の学校制度

日本の国土の二十六倍という広大なお国柄か、わが国のように学校教育法に従って全国統一された学制は施かれていない。従って州や都市によって相違しているようだが、大体のところ生後二カ月余で子どもは保育園に入る。そして三・五才になると幼稚園（幼稚園）に入園することになる。

幼稚園といっても、そのすべては日託制（毎日早朝親が園につれていって夕食後ひきとる）か全託制（月曜日の早朝親に連れられて登園し、土曜日の夕食後ひきとられる）である。そして六

・五才(又は七歳)になると小学校に入る。小学校は六年、又は五年、中学は五年制だが、はじめの三年が初級中学で、後の二年が高等中学である。大学は大体四年だが三年、又は五年制もある。

○ 鍛えられた子ども

総じて中国の子どもも教師も鍛えられているという一語につきる。教師達は華国鋒主席の「子どもを大切に教育しよう」というスローガンのもとに祖国を愛し、党を愛し、労働を愛し、科学を愛すという指導目標に従って堂々と胸をはって教育している。

幼稚園の子どもは両手を背に組んで背骨をうしろから押すようにぐっと胸を張り姿勢正しく教師の話に聞き入り、保育室に外来者が入って来てもキョロキョロと見廻したりするとはいない。教師に指名されるとさっと立って、たとえそれが間違った答えであっても憶することなく力強く一語一語はつきりと答え

ていた。

日本の子どもによくあるような教師に指されて、もじもじ立って「エートネ・エートネ……」などと返事にもならない言葉を繰りかえす煮え切らない態度の子は見たくとも見られなかった。

どこの幼稚園でも舞踊などは好んで踊って見せてくれる所であるが、そのステップなどは高度なものとみごとにこなしていたし、表情などもまことに豊かである。

武漢の永紅幼稚園では四才の女児が平均台の上でブリッジを上手に演じてみせた。上海の労働者団地の幼稚園では一週三十分の労働時間があって、参観した時は工場から送られて来た豆電球の箱詰め作業をしていた。労働を愛する精神を養うためだそうだ。

これらから考えられることは、中国では幼児を赤ちゃん扱いしていないということである。幼児は幼児なりに一人の人間として人格を認め、これを尊重してそこから無限の可能

性を伸展させようという姿勢が随所に伺えるのである。

華主席のいう「子どもを大切に教育しよう」というその大切とは、甘やかしや過保護ではなく厳しさこそ真の愛情であるという信念に立って、鍛えることによって性格形成の上にたくましいトランスを養い心身共に立派な人間として育てることに他ならないのである。そしてこれが見事に実践されているのである。

これは小学校を参観しても、中学校を参観してみても全く同じであり、むしろ上に進むにつれてこれらが自然と身についている感じがえうけたのであった。

○ カギツ子対策——少年宮

中国では家庭婦人はいない。つまり夫婦共働きなのである。国家の要請に従って婦人も男性と全く平等な職場に労働者として進出している。

こんな話があった。武漢の工場参観の際に婦人の労働問題に話がすすんだ時、通訳がある団員に「あなたの奥さんは何をしていますか？」と質問され、「家に居ますよ」と答えると「あなたの奥さんはまだ解放されていますね」といわれたのである。

従って中国の児童・生徒の両親はすべて労働についているのであるから放課後の彼等はいわゆる日本でいうカギツ子である。そこでこれらの対策が当然問題になるわけであるが、この対策として生れたのが「少年宮」もしくは「青年宮」である。

少年宮とはこれらの児童のために富豪の邸宅を国が没収してその広い邸内の数多い部屋を利用してピアノ、バイオリン、バレエ、声楽、古典音楽、伝統工芸、科学、医療等それぞれの能力別にクラスを編成して課外指導を行う所でその指導には高い技能をもった労働者などから選ばれた人達が当たっている。ここには小学校から能力に応じて推薦されて送ら

れて来るときいたが、子ども達は好きな道だけにその打ち込み方も真剣である。

ここに於ける子ども達の活動も、制作物も仲々見ごたえあるもので、参観者の為に演奏してくれた舞踊や古典音楽などは技術的にも高度なものであった。彼等はここで夕方まで過し、すでに職場から帰った両親の待つ家庭にかえっていくのである。

われわれが中国に第一歩を印した時最初に抱いた疑問にこたえてくれたものは、まさにこの小年宮であったのである。

幼児は日託もしくは全託により完全に集団の中で教育され、小中学生は放課後は少年宮もしくは青年宮によって課外指導を受ける。

これは一面では子どもの教育はすべて国家管理下に置かれるともいえるのであるが、ともかく中国の子どもにかかる期待は大きい。従ってその教育には国をあげてとりくんでいるのである。

○子どもを大切に

その国の将来を占うなら、その国の教育をみるにしかず。今翻ってわが国の教育の現状を想うとき暗澹たらざるを得ない。勿論帰国してみて自由の風の尊さをしみじみと有難いと思う。がしかし余りにも自由に慣れすぎてこの自由の大切さを守るためにどうしなければならぬかを日本人のすべてが忘れてしまつてはいないだろうか？ 中国の教育なんて体制の違う国の教育が何になる——と短絡的に一笑に附してしまふむきもあるようだが、果してそれでいいのだろうか？

「子どもを大切に教育しよう」という華主席の言葉を日本の子どもの教育に少しでもたずさわる者はじっくり味わって見る必要があるのではなからうか。

○ ○ ○

あれこれ想いを巡らしているうちに、月はもう山の端にかくれようとしている。来年の

発表会には中国の印象が数多く発表されるこ

自然の恵みの中で

— 仏教美術の背景 —

○

さまざまな宗教と、その造形とのかかわり
合のなかで、おそらくわが国の仏教ほど、自
然を巧みに造形のなかにとり入れ、自然ある
いは自然をとり入れた造形が、その宗教的な
雰囲気の助長に役立っている例も少ない。

もちろんどんな宗教でも、その教えが広く
流布するためには、それぞれの時に応じて、
時代の思向や世相、社会の環境なども含め、

とになることだろう。



金子良運

(大正大学教授)

つまりは求めるものと対えるものとの心情と
手段が一致したとき、はじめてそれが可能に
なるわけで、もしこの相互の要求と対応にく
い違いがあった場合などは、いかに教えの内
容が正しく素晴らしいものであっても、それが
かならずしもそのまま、素直に多くの人々の
共感をよぶとはかぎらない。

いわば与える側は、人々が心に欲している
願望と、吸収する能力を適確に洞察して提供
し、求める側は、これをその時の心情におい

て選択し受容するわけである。

そして、しばしばこうした両者の間の優れた媒介として、造形が大きな役割りを果たし、とりわけわが国の仏教においては、自然がその効果をさらに側面から、さり気なくしかも情趣的に増大するのに役立っている。

いうまでもなく、自然の環境もしくは自然を造形にとり入れたこうした相乗効果は、とくに求める側の視覚と感情を満足させたとき、まさに教理教論の埒をこえて、人々に理屈を抜いた納得と安心を与え、その心をとらえてしまうのである。

しかもこの傾向は、民族の特質として、他にみられない繊細で豊かな感受性をもつわが国においていちじるしい。

たとえば八世紀、あのおおらかな大和の山なみを背景に、緑の瓦が日に映える壮大な丹塗りの伽藍、金色に輝き美しく彩られた仏たちの姿。おそらくこれを目のあたり見た当時の人々は、ようやく根づいてきた異国の教え

に対して、畏敬とともにかぎりない憧憬をいだいたに違いなく、そしていま我々は、それからの長い風雪を経たこれらに対して、それをなしとげるための様々な困難や苦しみ、そして犠牲に思いをはせながらも、しかもはるかに強くほのぼのとした郷愁に心引かれるのである。

しかもその時我々は、まったく無意識のうちに自然の美しい景観を背景に望み、四季折り折りの風情に包まれた自然との調和において、一層の美を感じるものなのである。

すくなくともわが国の自然は、たとえ一部に峻厳さがあるとしても、おしなべて穏かであり、したがってこの風土に育くまれた人の心も極端な烈しさを好まない。

こんな恵まれた環境を土壌として展開しているわが国の仏教は、時として、まったく他の国のいかなる宗教的な造形にも見られない、情緒にあふれた表現の工夫を試みていた。

たとえば、古くは法隆寺の橋夫人の念持仏

と伝えられている阿弥陀三尊像の、あの蓮華座を高く支えている見事な蓮池。平等院をはじめとし、いずれも前池をひかえた数多くの阿弥陀堂の遺構。厳肅な真言の道場を荘厳する山水図屏風。あるいは一面に華麗な蓮華を配した当麻寺の厨子扉。目のあたり極楽の有様を説示している極彩色の浄土曼荼羅図。公案として使われている禅機画の風景。懸軸や障壁画の主題として、もっとも好まれる自然の描写。高位の袈裟の遠山模様。なかでも日にみずみずしい四十八房の生花が仏を飾る、法然院のさわやかな作法など、数えあげれば枚挙にいとまがない。

とりわけ畳々たる自然のなかにつつまれた堂塔のただずまいや、建物から眺めた庭の風情など、どれ一つをとってあげても、あまりにもその幅は広く、またかかわりが深く、しかもことにあたって、我々の先人は、かならず自然との調和を念頭において、その効果を仏のために、仏の教えを説く寺のため

に、そしてそれを求める大衆のために還元すべく計算しているのである。

○

私は仕事から多くの寺にお邪魔することになる。はじめのうちは、ただひたすらに目的のものにとりついて、眺め、動かし、計測し、写真を撮り、特長をノートし、人が居ればウルサイなと思い、ある時はやや得意顔をして、きわめて近視眼的にほとんど他を顧みるゆとりをもたなかった。

だからその頃の私は、一応仏前で手を合はせはするものの、あくまでも仏像の存在を、信仰の対象として真摯に受とめることよりも、一つの興味あるものとして接していたにすぎなかった。

それがいつの間にか、仏像を仏の姿として観ずるようになり、出来ばえの優劣とか、造像された年代とか、様式とか作者の推定とかよりも、むしろこの像を発願した人の、造つ

た人の、拝した人の心情に心引かれるようになってしまった。

こう気がついてみると、それはとりもなおさず、私自身の狭かった視野に多少の広がりができ、目をあげて周囲を見渡す余裕が生じ、風物を愛でる楽しさを覚え、そしていまさらのように己の高慢な不遜さを恥じ、同時に自然の恵みの素晴らしさと、釈迦の教えの貴さを知らしめてくれるものであった。

いまさらこんなことでは、いささか遅きに失したうらみがないわけではないが、それからというもの、以前にもまして寺詣りが好ましくなった。それも気負いこまずに気の向くままに、雨でよし晴でよし、曇りよし、雪でよし、天与の条件に素直に従って、その中に身をおいて寺をたずねてみることにしている。

不思議なことにそうすると、その行先の寺や仏像は、必ず私に何かを教え語りかけてくれるのである。もちろんそれは難しい教理の説明でもなく、押つけがましい信仰の対話

でもなく、いとも自然にものの道理と、宗派の主張を超えた仏の道の無限の広さ深さなのである。



正直なところ、私には難解な仏典の真意の把握は不可能で、それに関する知識は無に等しい。大変不謹慎な言い方かもしれないが、もし聖典の字句の解釈だけにとらわれて、それで事足りりとする考え方があれば、また一方で、私のようになに一つ実感をもって知らなくても、ひたすら寺を好み、無条件に仏を愛し、自然のなかにその存在を観ずる者があってもよいのではないだろうか。そして、おそらくこういうことが、実際の大衆の信仰につながるものと思はれてならないのである。

ただ残念なことは、しばしば私のこんな他愛もない慣れと安らぎを、いとも無残に現実の汚土に引戻してくれるのが、多くの場合そ

自然を考える

の場に介在する白衣の人々である。その場限りのエセでも結構、その人々にたとえ一片の衆生に対する仏者の思いやりと感謝の行為があったならば、いかほどの救いと親しみ、尊敬の念をいだかせることができるであろう。幸いにも自然にはこんな俗臭は一切ないのである。

それにしても、いまの若人達をよく寺巡りをしている。観光でも見物でも一向に差支えない。これがいわゆる仏縁というもので、いつか必ずそれが仏道に関心をもつ機縁に成長するはずである。その意味では、私よりも現代の若者たちの方が、よっぽど豊かに仏性をもっていることになる。

念^{ねん}持^じ仏^{ぶつ}

定価 二五〇〇円（送料 二〇〇円）

○お在家の方々の中には、ご仏壇をお持ちでも、阿弥陀如来をおまつりしていない方、お位牌だけおまつりしている方が意外に多いのではないのでしょうか。この様な方々のために、仏壇用として念持仏を謹製いたしました。阿弥陀様と、高祖善導大師・宗祖法然上人の尊像をおまつりした携帯にもお手頃な仏様です。どうか、多くの人々の魂棚におまつりいただくことを切望します。

（発売元）

（取扱い）

〒153 東京都目黒区目黒四一六―一二

〒102 東京都千代田区飯田橋二―二一六

株式会社 泰 童

法然上人鑽仰会

TEL (〇三) 七二一―六〇〇六

振替（東京）八一八二一八七番

五重のわかれ



せん 英 田 竹
えい だ たけ

(浄土宗宗議会議員)
(天理市善福寺住職)

先日亡くなられたお婆さんの息子さんや、お孫さんが夕方より、菩提寺へ来て門前に提灯を出したり、本堂の片隅に帳場をつくってたくさん、経木塔婆を出したりして、かいがいしく今夜勤められる「五重のわかれ」の準備をしておられる。

この「五重のわかれ」というのは、わかりやすくいえば、五重の同行がなくなれると五重伝法を相伝した菩提寺の本堂で行なう五重同行の送別の追悼会である。

天理市和爾町（元奈良県添上郡樺本町和爾）の善福寺が、いま私が住職をつとめさせていただいている寺である。奈良盆地のやや中央を東の丘陵地帯で、昔の「山の辺の道」の沿道で田と畑を中心とした農村である。最近はいちごやなすのハウス栽培が盛んで、村のすぐ南に名阪国道が通っている。

東西約七キロメートル、南北約二十三キロメートルの奈良盆地の中に浄土宗の寺院が三百三十余ヶ寺を数えている。昔から「大和五重」といって、五重相伝のたいへん盛んなところである。善福寺に縁をいただいて住職に

なつたのは、十七年前であるが現在では約三年ごとに、五重相伝と授戒が交互に行なわれるようになってきた。従つて必然的に或る一定の年令になると必ずといつてよい程、村民はお念仏の同行になるために、五重相伝を受けるというならわしになっている。

どこの地方でも同じように、亡くなつた人があるとき、夜、葬式とあるが、当地区では葬式の翌日「逮夜念仏」と称して夕刻より、御不幸のあつた家へ各戸からお詣りして、住職と共に勤めをする。これは、お葬式とは別に村中の者の追悼会なのであらう、おつとめのあと故人を偲ぶ法話を一席つとめて解散となる。

更にその翌日、冒頭に書いた「五重のわかれ」のおつとめが、寺でつとまるのである。亡くなられた家のお手伝いの人達が、朝から本堂のお供えものや、ローソク線香などを持ちこみ、本尊で簡単な祭壇をつくつて、五重同行が故人を偲ぶ送別会の準備がはじまるのである。

夕方より遺族が施主となつて、帳場が開かれると、五重同行の人々が三々五々お寺へ集つてこられて、帳場で経木塔婆に故人の戒名と、自分の両親やご先祖など有縁のさきだちし人々の戒名を書いてもらう。その日の参集者の書きだしが大体出揃うと、みんなでおつとめをして住職がその経木塔婆の回向をするのである。

回向のあとは、百万遍の大きなじゅずが出され、参詣者全員が大きな輪になつて「百万遍じゅずくり」を老いも若きも幼なきも、手にじゅずをくり、口にお念仏を称える。そのあと、故人をしみじみと偲び、五重の会座に連なつたその本堂で、五重相伝の思い出を語り、俱会一処、一蓮托生のよろこびに願いを馳せるといふ、なかなかうるわしい集いである。

いつの頃からおこなわれるようになったのが定かではないが、昔は大勢の子どもが参集してお菓子などのお供物を配つたそうである。私はこのおつとめのあと、五重のことや、中陰のころ、中陰中のおまつりなどのお話をして、若い人々にも仏法の心や仏事のことをわかりやすく解説させていただいている。

いま、浄土宗では昭和五十五年に、善導大師の一三〇〇年の御遠忌を迎えるべく、一宗をはじめ、総大本山もいろいろとその準備をしているのである。このときこそ、お釈迦様の八万四千の仏法を称名念仏一すじにおまとめいただいた。善導大師の信仰を深くいただき、偏依善導と讃歎し、専修念仏の道をわが口にお開き頂いた法然上人への報恩のためにも、浄土他力の信の確立をすべきときでなからうか。

そのためには、在家の五重相伝こそ専修念仏に目覚めていただく最も大きなチャンスになり、名実共に浄土宗の信者となり、念仏同行になっていただく機縁となることと深く信じるものである。

在家五重は、小石川伝通院が発祥であるという。その東京や関東の地であまり五重相伝が行なわれていないと聞く。是非五重相伝の縁が結実し「専修念仏」一行の道に目覚め、元祖様の申されました、生活の中に念仏があるのではなく、お念仏の中に生活がある「浄仏国土」成就への大きな機縁になればと願うこと節である。

かくして、やがて「百万遍じゅずくり」が終って総回向となって「五重のわかれ」は終るのである。今、手から手へと繰り送った大きなじゅずは、父や母がご先祖が同じように、手より手へと繰り送ったものである。その手垢によって、長い年月のうちに茶褐色に光り輝いている。一つ一つの珠に先人のお念仏が、欣求浄土の願いがこもっている。

そこに永い伝統と村人の素朴な信仰が、生活の中に調和したものが感じられるのである。願わくば、全国津々浦々に「五重のわかれ」のおつとめが行われるようになりたいものである。

梶村 昇 著

『法然のことば』（宗祖のことばシリーズ④）

B6判 二三四頁（カルチャープックス）

定価 八〇〇円

（発売元）

〒102 東京都千代田区富士見二一六―九

雄山閣出版株式会社

△民話シリーズ▽

鬼面の鳥



谷川たにかわのぶ也や

(郷土史家)

人里離れた草深い山寺に、一人の若い尼僧が住んでおりました。今では毎日のお念仏のおかげで、気持も大分

おちついてまいりましたが、それでも、半年ほど前に起きたいまわしい事件のことを思い出すたびに、悲しみの底に突き落されるのでした。

その事件とは、尼僧を天外孤独にした悲しい出来事だったのです。

出家する前、ミネと呼ばれていた尼僧は、陽気な父、慈悲深い母、それにやさしい心持ちの兄、吾助に囲まれて、実にのびのびと育ち、たのしい少女期を送っておいりました。野良仕事に出る父や母の後を追ひ、いつしか友だちとなつたうさぎやきつねと戯れたり、野の実を採つて食べたり、それはたのしい毎日だったのです。

こんな少女、ミネにも小さな不安があり、徐々に大きな不満となっていきました。

十日の間に一日、母は採れた野菜を背負って街に商いに出かけるのが常でした。その帰りには、いつも土産を買ってきてくれますので、それはたのしみでしたが、父の行いを見ていると、そんな土産は、どうでもよいことに思われてきました。それより、なんとしても父の行いを止めさせねば、という思いのほうが強くなっていったのです。

母が行商に出かける日、その日は、父にとっては唯一のたのしみの日だったのです。この日が来ると父は、朝食もそこそこに、銃を片手に猟に出かけました。そして、夕ぐれせまる頃、その日の獲物を肩にかけ、意気揚

揚と帰えってくるのでした。ミネにとっては、その時がとても悲しい一瞬だったのです。恐る恐るのぞきこむ父の背には、遊び仲間のうさぎやきつね、それに小鳥たちの無惨な姿がありました。

「トトさん、どうして撃つの、みんなかわいそう、遊んでもらえなくなってしまうから、もう止めて下さいな」

ミネは、猟から帰るたびに父に哀願するのでした。

「だめだ、猟はワシの生き甲斐じゃ、当たったときの感触はなんともいえんからのう」

娘の切ない願いを一蹴する父の顔には、日頃の温和な面影は見られませんでした。

ミネは、このやるせない気持ちをどうすることもできずに、ただ泣きじゃくるだけ、そのうち泣きづかれし、夕食もとらず、眠りにつくのが常でした。そして必らず夢をみるのです。そして、うなされました。

ミネが十五歳を迎えた秋のある日、父はいつものように猟に出かけました。その夜、ミネはそれまでにないような恐い夢をみたのです。

……広々とした野原で、ミネはいつものように動物たちと遊びまわっています。それはたのしいひと時でし

た。しかし、動きすぎて空腹感を覚えました。すると、それまで遊び相手であった動物たちが、とてもおいしそうなものに見えてきたのです。手まねきすると、動物たちは警戒するそぶりも見せず近寄ってきました。ミネは、その中から肉づきのいちばんよさそうなうさぎをつかまえ、一気に食いつきました……。

「ギャア！」

「どうした、ミネ、しっかりしろ」

隣りで寝ていた兄の吾助は、妹の悲鳴で眼を覚し、冷汗をかき、うなされているミネを見てびっくりし、ゆすり起しました。

「ああ、兄さん、夢だったのね、よかった」

ミネは夢の一部始終を兄に話しました。

「そうだったのか、かわいそうに、恐かっただろうね。私もトトさんの猟のことが、とても気になっていたんだよ。だが、もう心配はいらない、私がなんとかするからね。安心して眠りなさい」

吾助は、何か覚悟を決めたようでした。

それまでの吾助の立居は、いつも物静かで、積極的な行動はほとんどとりませんでした。父が猟に出かける日



も、冷やかな眼で見えてはいたものの、それを止めさせることはしなかったのです。

ところが、ミネに約束した日から以後、父が猟に出かけると、決まって吾助は家をあけました。そして、夕ぐれちかく、父が帰宅すると、その後を追うように帰ってくるのでした。

そして、吾助が猟に出かける父の後を追うようになってから三回目のことです。その日は、山から吹き降す寒風で、身が凍えるほどでしたが、父はその寒さもいとわず猟に出かけました。いつものように山間を縫い、獲物の出そうな所に身を潜めたりしておりました。

しかし、どうした訳か、この日は何の獲物も姿を見せないどころか、鳥の鳴き声さえ聞えないのです。

「おかしいな、場所を変えてみるか」

つぶやきながら歩きはじめ、一度も行ったことのない山間に獲物を求めて入っていきました。すると、動物や鳥たちの鳴き声が聞えてきました。

「おお、いる、いる、こっちの山に来ていたのか」銃をさすりさすり、深く入っていきました。だが、鳴き声はすれども姿は見えないのです。

その時、突然前方の笹藪を中から、大きな熊が現われました。驚いた父親は、夢中で引金を引きました。そして身を沈め、様子をうかがいました。動く気配はありません。どうやら射止めたようでした。しばらく様子をうかがっていた父は、やがて熊に近づいていきました。

ところが、そこで死んでいたのは、最愛の息子、吾助の変りでは姿だったのです。父親の驚きは一樣ではありませんでした。吾助は、身をもって父親の殺生を止めさせようとし、その生命を絶ったのでした。

その頃ミネは、いつになく帰りの遅い父と兄の身を安じ、母と戸口に立って、その帰りを待っておりまして。

陽はすでに沈み、辺りは薄暗くなってきましたが、父と兄の姿は一向に見えませんが。ミネの不安は、だんだんに大きなものとなっていきました。何か間違いでもあったのではないかと考えていた、その時です。父親が、兄吾助の名前を呼び、泣きながら帰ってきたのです。父の背には、大きな黒い塊がありました。

「すまない、ワシは息子を射ってしまった。熊と間違えてじゃ。もう二度と銃は手にせん。許してくれ」

父は、地にたれ伏し、ただ泣き呼ぶだけでした。

父の背から降された黒い塊は、吾助の亡骸だったので。兄が心に決めたのはこのことだったのか、他に止めさせる方法はなかったものか、とミネは、ただぼう然とその場に立ちすくんでおりました。

その時です。突然、大きな笑い声がしました。

「アハハ、アハハ、お前さんはそれほどまでに殺生をしたいのか、愚か者よ、悲しいことよ」

その声の主は、あの慈悲深い母でした。言い終るが早いか、母の形相は、みるみるうちに変わり、鬼面となり、手がぬけたかと思うと、その部分から大きな羽根が生じ、二、三度ばたつかせ、大空に舞いあがり、一瞬のうちにその姿を消してしまいました。

「ああ、息子ばかりか連れ合いも失ってしまった。どうすればよいのじゃ。わからん、ミネ、ワシも二人の後を追うから、吾助を懇ろに供養してくれや」

そう言い残すと、父は愛銃を眉間に当て、自ら引き金を引き、命を絶ってしまったのです。

ミネは悪夢を見ているような気がいたしました。夢であってほしい。そう願わずにはいられませんでしたが、すべて現実の出来事でした。

一人残されたミネは、山里にある草庵に入り、髪を切り、父と兄の供養塔を建て、念仏三昧の生活を始めました。しかし、悲しみは募るばかりでした。

ミネが草庵の生活を始めてから十日ほど経た頃のことです。村の子供たちが一日に一人、大きな鳥にさらわれるということを風聞したのです。もしや母ではないか。そんなはずはない。ミネは一生懸命打ち消しました。

だが、ミネの不安が現実となりました。その日の夕ぐれ、草庵の木立が大きく揺れたかと思うと、子供を口にくわえた鬼面の鳥、変りはてた母が境内に舞い降りてきたのです。

「母さん、その子供を助けて下さい。お願いです」

「私もそうしたい。だけど、子供を一日に一人殺さない」と胸が焼け、それは苦しいの。幾度止めようと思ったか知れないわ。でもだめなのよ。父さんがした殺生の報いで、私はこの仕末。でもこの子供は助けるわ。ミネのたのみを無にはできなわ。私が苦しめばすむことだから」

鬼面の鳥は、そう言い終ると、子供を残し、どこかへ飛び去っていきました。

その晩、ミネは枕辺に鬼面の鳥を迎えました。

「ミネ、私は生き続ける限り殺生を続けなければなりません。悲しいことです。母とは思わず殺人鳥を成敗するつもりで射落して下さいな。明朝、境内のいちばん高い木にとまって待っていますから」

翌朝、ミネが眼を覚し縁先に出てみると、夢告どおり鬼面の鳥は杉の木の上で羽根を休めておりました。射るべきか、射ざるべきか、ミネは悩みました。母の命は助けたい。しかし、何の罪のない子供たちを、毎日一人づつ殺すことも出来ない。

ミネは意を決し、鬼面の鳥めがけて矢を射りました。矢は眉間に命中し、大音響とともに鬼面の鳥は地上に落下したのです。ミネがかけ寄ると、見にくい鬼面の鳥ではなく、あのやさしい母の笑顔がありました。

「ミネ、ありがとう、やっと苦しみから救われたわ」

静かに語りかけながら、母は息を引き取りました。

ミネは、父と兄の隣りに新しく母の供養塔を建て、懇ろに弔いました。そして、このいまわしい事件を通じ、生きることのつらさ、大切さを体得し、両親、兄の霊を守りながら、精一杯生きねばならないと一人静かに念仏三昧の生活を続け、天寿を全うしたということです。

浄土句集

一田牛畝選

炎天をながながと来て堂静か

東京 真野 竜

盆過ぎの枯れしままなる櫓かな

東京 猪瀬 幸子

片蔭に杖を休めて九段坂

広島 香月てい子

遙かなる娘を想ひつつ秋彼岸

愛知 山本 称楽

下闇に地藏菩薩の笑み在す

京都 安藤 寛

安居僧またも負けゐる睡魔かな

東京 阪入 志津枝

朝曇一ときものの動きなく

東京 栗原やえ子

都心にも夏の憩ひの不動滝

棚線の間も妻の落着かず

福岡 原 敬二郎

評 棚経は五分間もかからぬ。妻は僧のう

しろに坐って拝む時間はない。僧にお茶の用意や、お布施も包まねばならず、短い時間に忙しく落着くことも出来ないことをよくまとめられている。

福岡 荒牧 還愚

水遊び遂に裸足になりし孫

東京 真野よし子

モダンにてちよと恥しき夏帽子

東京 阪入 等達

薰風や親しみ易き阿弥陀経

東京 遠田念悦坊

山の朝夏鶯のこだまして

東京 田中 秀代

東京 鈴木 葉子

口の端の泡を気にしつビール酌む

三重 森 静枝

ならわしの施餓鬼の齋のおから汁

山形 松田 光誉

どくだみの無縁仏を埋めけり

福岡 権藤みきを

秋海棠みなうつむいて咲いてをり

東京 原口 敬子 寄せる波引く波砕け夏の海
みちのくの車窓に夕焼美しく

東京 星野 小登 幼児のこわごわ触るる甲虫かぶとむし

長野 原 幽遊 送り火や又来年と約束し

学童の列長々と花野行く

東京 末常てる子 蟬捕りの籠さげ行くは弟か

福岡 行正 明弘

山形 松田 允子 うたた寝の孫の腕かひなに蚊のとまる

夏休み誦経の吾子の声透る

大分 丹羽 難中 絵日傘を上げてやさしき会釈かな

福岡 堀 松月

福岡 高良 慈風 和尚さんと呼ばれふりむく宵祭

初盆の門に盆綱氣勢いたち

不求自得ふぐじとく癒えし短気や菊作 一田 牛畝

福岡 国友 星畝

東京 鳥居 千代 鈴虫に餌やる日課の和尚かな

◇“浄土句集”欄投稿要項

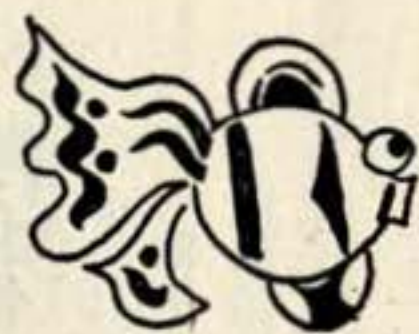
ホトトギス同人の一田牛畝先生（福岡市正定寺住職）を選者にお迎えして誌面に登場した、この“浄土句集”のコーナーはなかなか好評です。今月号より、二ページに増頁して、さらに多くの読者諸兄からのご投句をお待ちすることになりました。どうぞ、俳友のお仲間をお誘いいただいで、振ってのご投句をお願いします。

一、ハガキ一葉に二、三句づつお書き下さい

一、投稿先 〒812 福岡市博多区中呉服町10-14

正定寺 一田牛畝先生宛

信仰への道



『無量寿経』に説かれていること(一)

吉村孝

私達浄土宗念仏信仰者は、朝に夕に法然上人の教えの通りに念仏して、毎日安穩に生活できることは誠に幸福の至りであります。仏教經典を見ますと、持戒という文字が数多く見られます。

この持戒は菩薩といわれるほど修行を積んだ人でも、その菩薩行の中に実行の要件として持戒が入っているほど、仏道修行には重要なものなのであります。しかし、それほど重要な事であっても、その持戒の意味は誠に易しいものであります。つまり法然上人が、毎日念仏をなさいと教えました時には毎日必ず念仏して、又食事の前後に念仏なさいと教えました時には教えられ

た通りにすることで、教えられた事を常に心に留めて忘れずに行うことが持戒であります。さて、このことを心に少しく考えてみたいと思います。

「法然上人全集」の問答の中に、専修念仏を説きながら、更に『無量寿経』に書いてある難意の事も種々説かれてあります。これらの教えは念仏信仰を更に堅固にする為のものであると思われます。

法然上人は念仏の根本思想として「浄土三部経」に随順しておりますが、その中にも『法華経』と同じ意味の言葉が沢山現われています。このようなことから仏教経

典の中で『法華經』が最勝であるとよく云われますが、それは『法華經』だけを見ているからで、『無量壽經』などを見ますと、その内容は全く『法華經』と同じです。その一つを見ますと『無量壽經』卷上の「讚仏偈」に次のように書いてあります。

たとい仏ましまして、百千億万の無量の大聖、
数、恒沙のごとくならんに、

一切のこれらの諸仏を供養せんよりは、
道を求めて、堅正にして卻かざらんにはしかじ。

この意味は数多い仏を供養するよりも、仏の教えを堅く正しく守り、怠らず途中で止めることなく励む方が勝れているということです。

又『法華經』法師品には「藥王、在在處處に若くは説き若くは読み若くは誦し若くは書き、若くは經卷所在の處には、皆七宝の塔を起て、極めて高広嚴飾ならしむべし。復た舍利を安ずることを須いず。所以は何ん、此の中に已に如来の全身います」とあります。この意味は、『法華經』の修行は淨土教と異なっておりますので、經典を説いたり又読み誦し書くという修行方法で、『法華經』經典の在る所は特に尊重し嚴かに飾らなければな

らない。又、仏の入滅の心配などする必要はない。なぜならこの『法華經』の經典の中にはすでに如来の全身が入っている、ということでもあります。如来の全身が入っているということは、『法華經』を学ぶことにより仏・菩薩が生れるからであります。

『無量壽經』の偈と法師品の經文とを対比しますと、偈の方は仏の供養よりも仏道修行が勝れていると説き、後の經文は如来の入滅のことなど考えなくてもよいから、經典修行に精進せよと教えております。これは共に仏・如来のことよりも經典を受持し読誦して能く理解してその教えを身につけて実践せよと云われたものであります。

世間を見ますと、多くの親は我が身の幸わせよりも子供の幸を願うものです。仏も又、仏の入滅や供養のことなど心になくなくてもよいから、道を堅固に正しく求めよと戒めることと、その慈悲は仏と親と違いはないと思えます。仏の慈悲につきましては、『觀無量壽經』に「仏身を觀るを以ての故に、亦仏心を見る。仏心とは大慈悲是れなり」とあります。親の仏心をよく窺うことができず。念仏者にとりましては、まずもつとも肝要の言葉でもあります。

(つづく)

〇〇江戸後期の宗門歌人〇〇

良洗上人の研究(二)

よし だ こう がく
吉 田 光 覚

(岩手県紫波町極楽寺住職)



(八)『東桜集』をめぐる

前稿に、本居内遠の『東桜集』に寄せた跋文を挙げておいたが、更に良洗上人の人物を紹介する意味で、当時、江戸三大家の一人と言われた俳人一具こと、開蓮社良導上人悦応和尚と親交の深かった江戸の歌人由誓の跋文もあるので、その一部を記しておこう。

この頃、桑折の宮観音寺の現住遜阿老衲かねて文筆のすきものにて、手まめに詩歌連俳文章なにくれとなく写しとり一編となし、同志の友にもしらせまほしさに上梓して遠近に投せんとす。集成てのち、見るものは其労をおほかたに思ふも有べけれど、老衲は嚴寒の

薪をつくし、炎天に水をたゆし、勤行のいとまなきいとまになせしわざなれば、わさくれながらおろそかによむべからず、ひそかに撰者のおもむきをおしはかり、風老つたなきをわすれもとむるにいなまず、くち木書して賞美す。

嘉永五年十月 為誰庵由誓

正に上人を忖度するに足る文章である。次いで上人が何故、『東桜集』と名けたのであろうか。その辺りを『号観音桜記』と題する上人の私記から探ってみる。

略前文——茲に吾師はやくも身まかり玉ひし翌年の弥生、大悲の桜例ならず、見るかひなく花ちび、木ず

ゑ憔悴しけるは、深草のさくらのこと、亡人を哀号せるものにやあらん。こは世にいましかりける時、いたく此桜をめでいつくしみ給ひ、詠る歌おほかる中にも、咲なやむ花の日頃は、みほとけの誓の風も頼むべき也など聞こへて、三十とせ余り愛玩せられければ、草木こころなしといへどもいみじう其名残をおしめるなるべし。果樹の霊たるもの三輪の杉夢の紫苑いにしえ今その例しなきにしもあらじかし。

わが大悲のさくらはミほとけの光とともに普く遠近に匂ひミちたはし、春は花につけ秋は紅葉につけて歩ミをはこぶも、人人に飛花落葉の因縁を結ばしむるも此桜のちからとやいわむ。うべなるかな。花は曼陀羅のあう理にして、いはゆる月氏に水蓮を花とし、支那に牡丹を花とし、吾皇国にはこの桜をなん花と称する。ことに万物至美の惣称にして、あるは一時榮耀の花あり、あるは不變真如の花あり、そは万世を祝ひ比翼をかたらひ、夢幻をさとし、無慾を示す。迷悟も一朵微笑の花の外にやは出べき。かるがゆえにやんごとなき高貴隱逸の徒といへども、世をさけ道をもとむるのなかだちとせざるはなし。かう世にかくはしく愛

多きは此のさくらに勝る花ぞなかりける。よりてこたび大悲の御名をわが老木の桜におはしめて、観音桜とたたへなば、その功德おのつから声の中に具りて讃称仏名の果をうるにひとしからむかも。

西館山大悲閣のあるじ遜阿かしこみ誌す、

嘉永二己酉弥生日

宵に雨の降りける次ぐるあした、つとめて物にまかる道にてよめる

高館やふもとのさくら咲そめて

よひの名残の雪かとそみる

桜に寄せた上人の氣持が躍如としている。上人の董職された桑折町の観音寺境内は、今もなお桜の名所として地方人の心を奪っている。老桜の下に、

“飛咲の花に朝日や夢越し”

遜阿老人

の句碑が立っている。『東桜集』の題名は、単なる字意を超越して、僧侶歌人の悟道の心境からこそ生れ出たも

のであらう。

(九) 良洗上 の俳句

鶯の老を鳴けり氷雨のあと

涼しさや埋樋の筋をゆきもとり

比あひの有てみなやむ砧かな

夏しらぬ有明見たり志津の奥

ミの置てみな田へ下りぬ志みつ哉

暮はさす戸溜に巣くふ雀かな

八朔やぬれし扉を曲突のうへ

『奥の細道』ならずとも、月日は百代の過客である。

行きかふ年もまた旅人である。日々夜々折々に触れ事に接したもろもろを、鋭い詞藻に捉えて蓄いおくことは、素晴らしいことである。俳句は季題を必要とする。だが、歌に素人である私は、季題よりも、その句を詠み出した折の、本人の心境、あたりの環境にむしろ興味を覚えて心引かれるのである。次に、それらを例示しよう。

多年の修験むなしからず、三山を懸をさめしよろこびの

あまり、

夏しらぬ有明見たり志津の奥

また、以下、出羽今熊野温泉に浴せること三回り、十年来の宿腦すこやかに平解の験を得て御山を下る折から、

やみぬけし身は空蟬のかるさかな

雄島の見仏堂に宿りて、

日もはや七尾の方へ更にけり

楚旧老人八十賀、

ひこ生や孫枝までも梅の花

宝祚万々歳、

日の廻り月のめぐりて梅の花

帰庵の夜、

狭けれとゆつとりするや庵の□

打違ひ鶏頭ふしぬ嵐あと

洗はせる硯も煤の次手かな

京にのほりしとき、

九重のつらぬくや御忌の鐘

氏家浄翁居士の手向に、

花の雪や恵みの雨の野辺送り

子あまた残して妻みかりぬ夫の愁腸を、

をとこ手にさそや雛の出し納め

俳祖をはしめ近き世の名達知己はさら也胆月茶静伯遠の
靈達をも祭りて、

古池やわが棚経の読はしめ

ところで、観音寺の墓地に無縁同様の石碑がある。白
瑞院雪鴻逸禅士の法名、私は相当の方と思つてはいた。
ところが、『東桜集』には次のように記述されていた。

逸禅居士捻香 氏嶋田号雪鴻江戸人以儒業文画鳴於

世享年四十巳酉九月望二卒葬于吾大悲后山

四十余年秋の胡蝶の夢かそも

似三村生新宅松竹自画替（上人は蘭画が得意だったと思われ
る）、

蓬萊のほかにもとめぬ住居哉

春江漁楽図、

棹唄も名残りや浪に隴月

大黒天自画賛、

月花もこの中にあり種袋

おとつとし祖父母が還暦誕佳辰辰を寿き、ことしその子
孫可孝が合歡の表祝に仙桃軒の額字を贈りて、

その孫のまこもあやかれ桃の酒

秀樹うしの転居を賀す、

竹植て猶かけふかき舎り哉

庚子初冬檜原峠（伊達あしな古戦場）の難嶮雪中をして？

米沢の地に入し日は、

旅にさへ嬉しき日あり冬の蠅

名木戸薬師仏は死病臨終の期を誓ひたまふとかや、まつ
笹野の霊場にのほりて祖翁花の雲の碑（高サ八尺余瓊山社
建立）を感笑す、

花と降木の間や雪の大悲閣

東都社中国産の帯恵るゝ返礼、

隈田上野いさしめかへん花の帯

花さかり里の若衆や鎮将棋

佐藤清水にて、

雪に来て夏おもはるゝ清水かな

下長井河原を過る時、

星ひとつ磨かれ出ぬかれをはな

亀岡松高山、

手もふれす手むけん花よ松の霜

堺虚空蔵、

夜と日の堺ひの峰やわたる雁

檐下不動堂、

きたはしに是や忿怒の栗の穂

有耶無耶関、

このましき土用巖や等谷越

山形義光山、

秋たつや宵につけたる濯きもの

稲沢稲州亭を立て間沢久清房より案内を乞ふて八聖山に
まうて、さて松島川なと遙拝して慈恩寺館に入る途中、

草臥て目につきやすき野菊哉

慈恩寺浮図、

夕月やみねに見上る塔の屋根

奈曹廻白橋は此白岩の橋をいふなめりなと近き世の論ひ
も聞えければ、

白橋の謎もしるけれ月の霜

念佛ひじり三國志

(五十四)

——法然をめぐる人々

寺内大吉

挿絵 松濤達文画



一

御室の仁和寺は南になだらかな丘陵を配している。双カ丘（ならびがおか）と呼ばれた。春草の頂きに立つと、境内の桜が一望におさめれる。都人は季節を待ち兼ねてこの丘へ群れ集った。

いつか、そんな花見客相手の店が三軒四軒とたった。桜の季節が去っても店にはぎわった。茶を売ってくれるからである。

当時、茶は嗜好品として、また仙薬としても貴重であった。国内の茶畑は未だ生産量が微少で、大半を輸入に

依存していた。庶民がやたらと口に出来る品ではなかった。

茶屋——後世になってそう呼ばれた料亭の濫床である。ただし酒や女は未だ置かれていない。茶の饗応だけである。

ここで庶民大衆に輸入茶を普及させようとした意図に通貨政策があった。仁和寺の茶屋に限って使用禁止だった銅銭が許されたからである。

宋の銅銭を使用禁止にしたのは建久四年（一一九三）七月のことである。鎌倉の武家政権からの圧力だった。鎌倉の経済単位は米で、東西の同調を求めてきたわけであ

＜御室・仁和寺境内の桜＞



前号のあらすじ

鎮西上人と呼ばれ浄土宗の二祖と仰がれる聖光房弁長には成覚房幸西ほどの才気はなかったが、急進的な野心もなく、篤実に師法然をその依りどころとしていた。やはり幸西とは好一对で叡山以来のライバルであった。法然門下へ参入して間もないころ、幸西は、弁長があたかも長年にわたり上人に随待していたかのような印象を得ている。器量としては幸西よりも大きい。そんな弁長が、外側からの法難、内部での諸派諸流の分裂といった激動期に、ひとり鎮西の地にあったのは、師命をうけて入宋を決意したからにはかならなかった。しかし、当時の情勢は弁長の入宋を許さなかった。

その頃、盲目の琵琶法師生仏は太秦の広隆寺の僧房に住みついていた。安楽房遵西にせかされて、大和入道とともに、「六時礼讃」の節博士（メロディつけ）を急いでいた。

る。

政令で禁止はしたが庶民は容易に銅銭を手離そうとはしない。じきに解禁になるだろうと隠匿している。これを吐き出させるために輸入品の茶に限り、と特例を設けたのであった。

安楽房遵西が盲人の琵琶法師を案内したのはこの茶屋の一軒であった。すでに太陽も傾いて店に客の姿はなかった。

「未だのようだ」

安楽房は無人の室内を見まわし、広間のまん中に腰をおろした。留守番らしい老婆が白湯を運んできた。

「茶はないのか」

「ございますが……」

茶は商品なのでやたらには饗応できない、と言いたげな顔だ。

ぐずぐずしないで出せ、と安楽房は主人のように振舞った。

「女人たちが住んでいるという宿房はここですか」

生仏は見えぬ眼で室内を探ぐった。肌が隙間風をとらえる。粗末な仮普請らしい。現実には、ただの小屋掛けに過ぎなかった。

「此処ではない、御所だ」

仁和寺は宇多天皇(帝位八八四―八九七)が父光孝帝の菩提をともらって造立した寺で、晩年は自身も落飾して此処にこもった。以後は歴代の親王が入山し、法親王と呼ばれた。寺としての機能よりも禁裏の別所の観があつた。「御室」とか「御所」とか称されるようになった。

現在(建仁初頭)の法親王は後鳥羽帝の第二皇子道助で

あつた。建久七年の生まれだから、未だ幼い。生母の坊門局も仁和寺御所に住んでいた。

安楽房によれば、この茶屋で六時礼讃をはげんでいるのは坊門局に随待する女官たちであつて、

「みな院(後鳥羽上皇)の余りのご乱行に、禁裏に居たたまれなくなったのだ」

と説明する。

「院はそれほどのご乱行ですか」

「うむ。遊女や舞姫をしきりと禁裏へ引き入れてな、身分のある中宮や女房たちは同席出来ぬほどだということだ。院はしばしば熊野へ参詣なされるが、あれは神崎や江口の遊女と遊ぶのが目的で、帰洛されるときは必ずそのような女人を連れて来られるとのこと、つい先年も忌まわしい事件があつた」

つい先年とは正治元年(一一九五)のことらしい。

仁和寺の法師の娘で少将和光の妻となつた女性がいいた。後鳥羽帝は彼女の容色に魅かれ、強引に夫婦の仲をひき割いて側室とした。

じきに彼女は帝の胤を身ごもつた。ところが帝はそれを知光少将の胤であるとし、奸婦として殺害したという

のである。

「他人の妻を奪っておいて、奪った当座、すでに身ごもっていたらしいのだが、密通したとは横車を押すのも甚だしいではないか」

安楽房は仁和寺側の言い分を聞いているらしく、しきりに憤慨する。

この事件を、藤原定家は「明月記」でこう記している。

正治元年九月十四日知光少将ノ妻逝去云々。産ノ事ニヨルナリ。コレ仁和寺ノ法師ノ娘ナリ。先ニ中宮ニ参リ、観覧ニ備ウ。召シアリテ参院。寵衰ウルノ後、クダンノ少将コレヲ奸スルノ間、御気色ナオ不快ノ由、去年聞クトコロナリ

定家の記述は後鳥羽帝の愛寵が先で、あとから少将が密通したように書いてある。相手が上皇なので、また定家には歌道の仲間でもある遠慮が筆を控えさせた、とみたい。わずかな抗議が冒頭で「知光少将ノ妻」と明記していることだ。

当時の後鳥羽帝は年齢も若く気性は武人のように豪気

だったらしい。女性観も暴帝のそれに似ていたと言われている。

生仏にそんな搜話を伝えて憤慨している安楽房遵西だったが、やがて彼自身が少将知光と同じ運命へ落ちこんでゆくことを、この時点では知る由もない。

若い女房たちが二人、三人と連れ立って茶屋へ姿をあらわしはじめた。いずれも安楽房とは顔馴染みで親しげな言葉をかわしている。

「今夜はな、天下第一の美声の僧が礼讃のお手本を聞かせて下さる」

と、生仏を紹介した。

女房たちは不思議そうな眼で盲目の僧を見た。琵琶でも抱えていればそうは思わぬのだろうが、盲人の法体はやはり異形であった。

「みな、もうそろったかな」

安楽房が女房たちを見まわしたとき、誰かが答えた。

「あとは内典侍どのだけでございます」

「内典侍どのか。一昨夜もおみえにならなかったな。どこぞご加減でも悪いのではないかな」

「いいえ、今夜は是非にと昼間、申しておられましたよ」

別の声が叫んだ。

「ああ、あそこにおみえになりましたよ」

若い女房が茶屋の軒先へ走り出ていった。安楽房も首を伸ばした。

「内典侍どのだ……で、おつれの方は？」

女房の内典侍は見知らぬ仲間の女性をひとり伴っているのだった。

「ご存じなかったのですか。坊門のお局さままでございます」

女房たちがささやいた。

「何っ、お局さまが……」

道助法親王の生母、坊門局が登ってくるではないか。もちろんこれまで茶屋の六時礼讃へ参加したことはない。

今をときめく内大臣藤原信清の娘、後鳥羽上皇の中宮である。

安楽房は姿勢をあらためて自らを名乗り、さらに、

「先ごろは乳哺を分けて頂き、お礼の申上げようもございませんぬ。おかげで大仏勧進上人も悦んでおりました」
奈良へ俊乗房重源を訪ねた折、病床へ届けた菓子のことだ。

とだ。

女房たちが分けてくれたもので、主人の坊門局はあずかり知らぬらしい。

「妾もお念仏の仲間へ入れて頂きたいと思ひまして」

高ぶらぬ口をきいた。

未だ若い。黒髪が女房の誰よりも美しかった。

安楽房遵西は息を吞んで見つめずにはおれなかった。

盲目の生仏にはそんな外貌をとらえるすべがない。にもかかわらず先着したどの女房よりもすぐれた女人であることを知った。

二

匂ってくる香気が、ただものではなかったのである。

生仏の嗅覚は健康人よりはるかにすぐれていた。

夜の更けるのも忘れて仁和寺御所の女房たちは六時礼讃をくり返したいつづけた。生仏の美声と、巧みなりードが彼女たちを音色の桃源境へ誘い入れて刻限を忘れさせてしまったようである。いつもだと夜半を過ぎると法宴は閉じられるのだった。

それと、初めて六時礼讃に接した坊門局の熱心ぶりも

延引の原因となった。

部屋に灯した灯心が消え落ちて、しばらくは闇の底でうたいつづけた。戸外から朝の微光がさしこんできて、双力丘の南麓にらなる常盤の森で鳥が賑かにさえずった。

「もう夜が明けましたか」

坊門局は眼をしばたたかせた。

「この刻限までやりますと、み仏や諸菩薩のお慈悲が身体の奥底にまで泌みてまいります」

安楽房は唱導者らしい言葉を洩らした。たしかに闇と夜明けは、人間に見知らぬ世界を覗かせてくれる。

「ほんに有難いことでございました」

坊門局の言葉には実感がこもっていた。

「唐の長安では善導さまが都の子女を集めて、日ごと夜ごとこの六時礼讃をお唱えになっ

「善導さま……」

「いま法然さまがこの方の教えなら、どれ一つ間違いはない、と信じこまれている尊い僧です」

「やはりこの曲ですか」

「いや、曲についてははっきりしたものが伝わっておりませぬ。五百年も昔のことですゆえ、これから不満の点はこの生仏とまとめあげたいと思っております」

「こういう曲ですと、妾ら女人でも心易く唱えられます。ご法師方の誦經ではとてもついてまいれませぬが」

「善導さまも在家の人々に出来るようにお作りになったのです。曲は最もうたい易く、美しくなければなりませぬ」

「ああ、醜い人間どもの世界も、これをお唱えしている間だけは美しく見えるようでございます」

坊門局の言葉に、御所の女房たちは一斉にうなずいた。実感がこもり過ぎていたからである。

院の上皇をめぐる女どもの醜惡な姿。

女房たちは嫌というほど見せつけられてきた。

一例に久我通親の場合がある。

通親は権力を掌中にするために何度も妻を変えた。最後には後鳥羽上皇の乳母高倉範子と結ばれて新帝に喰いこんだ。範子の連れ子を後鳥羽院の中宮に入れて、土御門帝を産ませ、まんまと外舅父になりました。

ところが近ごろ、通親が養女でもあるその承明門院と

密通しているとの専らの噂である。権力の獲得や維持のためには母とも通じ、娘をも犯す、という畜生道である。

朝夕にそんな醜聞ばかり聞かされてきた坊門局が禁裏を逃げ出したのも当然であろう。

坊門局の伯母は後鳥羽帝の生母だった。いわば従兄妹結婚で、皇后としての地位が安泰かと結婚前は信じこんだものだが、たちまち「裏部屋」へ追いやられてしまった。前記久我通親の養女、九条兼実の娘宜秋門院、高倉家の娘修明門院など次々と権力者の娘たちが送りこまれてきたのである。

しかも上皇自身はこれら中宮のほかには手当り次第、舞姫や遊女に子供を産ませてきた。その親王、内親王の数は入籍された者だけでも二十名に及んでいる。

何のために生きているのか。夜を徹した礼讃唱和のなかで彼女はひとすじの光明を発見したかのようであった。

女房たちは三々五々、御所の方へ引揚げていった。

だが坊門局はひとり居残って動こうとはしなかった。

やっと起き出てきた茶屋の老婆に茶をいれさせて安楽房や生仏たちを饗応した。

生仏は静かに緑茶をふくみながら聞くともなく安楽房と坊門局の会話に耳を寄せた。

安楽房の話術にすっかり魅せられている様子が盲目の世界にも活写された。それは話術だけではなかったかも知れない。

「ところでお局に是非お目にかかりたいと申している者がございます」

安楽房は語調をあらためた。

「どこのお方でしょうか」

「女人でございます。鎌倉の阿波ノ局と申しますが、ご存じでしょうか」

「さあ……」

坊門局は当惑の表情を結んだ。

政治の世界には全く無知な彼女だった。まして遠く離れた鎌倉の武家社会など知人は皆無であった。

「將軍頼朝公の弟君、阿野全成さまのお局で、さらに申せば二位ノ禪尼の妹にあたられる方でございます」

二位ノ禪尼とは頼朝の未亡人北条政子のことである。

「そのようなお方が、なぜ妾に」

甘えかかる口調で訊いた。

「わたしにも目的は判りませぬが、ただ今、京にご滞留中では是非仁和寺の法親王やご母后さまに、と申しております」

「いつでもお連れ下さい。法親王も妾もただ今は日かげ者の身、どなたにお会いしても……」

影響するところはない、と自嘲めいた言葉になった。

生仏の耳は、この会話で目がさめたように鋭敏になっていた。

長年の習慣である。後白河法皇の近習として仕えた。

とらわれの身で平家の大奥にもいた。政治にかかわる話題には、どうしても聞き耳が立ってくるのである。それは行動が不自由な盲人が持つ自衛本能であつたかも知れない。

安楽房遵西は、どこで阿野全成（幼名を今若と呼ばれた）の妻と知り合つたのであろうか。そんな詮索が生仏の胸底で機敏に動きはじめている。

その間の事情を、生仏は後日になつて安楽房の口からじかに聞き知ることになる。

常盤の森から来たのであろう。つがいの雀が茶屋へ舞いこんで、生仏たちの頭上で飛び交つた。

「この次はいつになりましょうか」

坊門局は六時礼讃の集いを待ちこがれる意志をあらわにした。

「また一日おいて催したいと思います」

「明後日ですか。是非また教えて頂きたく……妾にはこのお念仏だけが生き甲斐になりそうでございます」

動作も顔色も、もちろん見えない。だが盲人特有の感性は、いまこの男女の心に芽生えたものを適確にとらえていた。

安楽房遵西も、坊門局も、異性としてのお互いを求め合っているのではないだろうか。

三

安楽房遵西は過ぐる正治元年（一一九九）の秋、鎌倉にいた。ふとしたことから梶原平三景時の事件へ巻きこまれたのである。

その年の十月、縁戚にあたる中原仲業の邸に身を寄せていた。仲業は中級の公卿だったが早くから鎌倉に下り、大江広元のもとで書記のような仕事にたずさわる男であつた。

＜結城朝光邸での別時念仏会＞



仲業の邸の根城にして安楽房は鎌倉武士たちに念仏を唱導していた。

その日、武將の結城朝光に呼ばれた。近ごろ、しきりと故將軍頼朝の夢を見る。何かがあるのだろうか、とたずねてきた。

頼朝が死んだのは昨年正月のことだった。

安楽房は一万遍念仏会を結城朝光にすすめた。一族郎党を集め、各自に一万つつ念仏と唱えさえ、頼朝の靈を慰さめるのである。

朝光は悦んでこの別時會に賛成し、十月二十五日自邸へ一族の者を集めた。安楽房が導師となったため、かねて彼から教化を受けていた志の御家人も何人かが加わった。

問題の人間はこの御家人のなかへまぎれこんでいたのである。

結城朝光は別時念仏が終ると、会衆へ向って述懐した。「吾妻鏡」は書く。

人別一万返ノ弥陀名号ヲ傍輩ラニ勸ム。各々コゾリテコレヲ唱エマツル。コノ間朝光、列座ノ衆ニ

談ジテ曰ク。吾レ聞ク、忠臣ハ二君ニツカエズト云々。殊ニ幕下ノ厚恩ヲ蒙ルナリ。遷化ノトキ還言アルノ間、出家遁世セシメザルノ条、後悔一ニ非ズ。カツハ今世上ヲ見ルニ薄氷ヲ踏ムガ如シ云々

結城朝光は頼朝の近仕として忠勤に励んだ。懐旧の情をこうして吐露したのである。頼朝の死とともに出家すべきだったのを、「あとを頼む」の遺言で元のままでいるが、自分はいつも後悔している。さらに今日の時世を見ると、すべてが不安定で薄氷を踏むようだ、と。

聞ク者悲涙ヲ拭フト云々

「吾妻鏡」はこう結んだが、現実はこの述懐が事件へとエスカレートしていったのである。来会した御家人の一人がライバルの梶原景時に訴えたからである。

二君に仕えずとか、世上薄氷を踏むが如しなどとは、現將軍頼家を批判した言葉ではないか。結城七郎に謀反の下心があるに違いない。

政敵を片っ端から駆除しようと手ぐすねをひいていた梶原景時はこの訴えに乗った。即座に頼家へ讒奏に及んだ。

ところが讒奏状が中間で洩れた。將軍頼家の身辺にいた阿波ノ局は、安楽房を招いて、別時念仏会の雰囲気をついた。聞いた。純粹な故頼朝への追悼以外の何ものでもなかった、と安楽房は答えた。それを確認した上で、阿波ノ局は讒奏状を結城朝光に示し、早く手を打たないと一身が危険だと告げた。

狼狽した結城朝光は親友の三浦義村に相談する。義村は和田義盛、千葉常胤、畠山重忠、宇都宮頼綱ら有力な御家人を糾合して対策を協議した。

ところが梶原景時を憎悪こそすれ好感を寄せる御家人は一人とてなかった。たちまち衆議一決、景時追放の連判状を作製してしまったのである。訴状は中原仲業に手交され、大江広元を通じて將軍頼家へ提出されることになる。

ただし大江広元は、余りの大事にこれの提出を渋った。下手をすると鎌倉で新しい戦争が勃発し兼ねぬからである。梶原景時の現職の長官であった。將軍頼家は景

時を支持するにきまっている。

「このさなか、奇怪な文書が京から届いたのだ」

と安楽房は生仏に説明した。中原仲業邸にいた彼のこ
とだから、自分の眼でその怪文書を確認しているらしい。

六波羅守護職をとおして朝廷からの勅令であった。

九州地方で叛乱がおこった。鎌倉將軍はすみやかに兵
を率いて上洛、叛徒を鎮撫せよ、という内容のものだっ
た。一方の文書だけで軽々しく將軍が動くわけにはいか
ない。侍所の長官梶原景時がひと足先に上洛することに
なった。

景時としても渡りに舟であつた。御家人が結束して自
分を糾弾しようとしている。ここはいったん鎌倉を離
れ、京にのぼって西国の兵力を集合し、そのままあちら
で梶原政權を樹立してもいい、ぐらいには考えたよう
だ。一族の者数十騎を率いて出発した。

ところが駿河国清見力関まで来たとき、待ちかまえて
いた大軍に包囲され、皆殺しにされてしまったのである。
「梶原一家の首は街道へサラシものになったそうだが、
奇怪なのは例の文書が何処にもないということだ」

「仲業卿がいったん手中にした文書ですか」

「生仏は訊きかえした」

「かりそめにも勅令が、あとかたもなく消えるとはな」

「もともと誰かの企らみではなかったですか」

「さよう、その張本人がいまに現れるであろう」

安楽房は笑った。

「すると……」

生仏は茶を嚥下しそこなつて、むせて咳こんだ。

今宵も六時礼讃の集いがある。しかし安楽房は日さか
りのうちから広隆寺へ生仏を誘い出しに現われ、双ヶ丘
の茶屋へそのままやってきたのである。

「まさか阿波ノ局が」

やっと胸がおさまった。生仏は追究してみる。

だが、安楽房は答えなかった。答えられぬのである。

なぜならその阿波ノ局が長身の姿を茶屋の扉口へ現わし
たからである。

供の者も連れず、單身であつた。

挨拶や生活を紹介したりしたあと、安楽房はやや切り
口上めいて阿波ノ局に問い詰めた。

「これから坊門のお局のもとへご案内する。ただし、そ
の前に用向きの内容をうかがっておきましょう」

「用向きの内容ですか」

生仏を意識してか、ためらおうとする。

「いや、この人は心配は要らぬ。世捨て人じゃし、眼も閉じているが、口も固く閉じたままです。それと、坊門のお局はやんごとなきお方。ご政情にも暗い。いきなり面倒な話を持ちこまれても当惑されるだけであらう。わたしがあらかじめうかがっておいて、よく説明してあげねばなりません」

安楽房の言い分は筋が通っている、と生仏も思った。

「面倒な話でもございませぬ。ご縁談なのです」

「縁談？」

「はい。千幡君に是非とも京の由緒ある家門から御台さまをお迎えしたい、と姉、二位ノ禪尼さまがご希望なのでございます。坊門のお局さまにはたしかお妹君がいらっしやいます。鎌倉へお興入れの気持がございますかどうか、うかがっておきたいと思ひまして」

千幡君とは二位ノ禪尼北条政子の次男、將軍頼家の弟である。後の將軍実朝であつた。阿波ノ局は、この実朝の乳母もつとめてきた女性である。

「千幡君には足利家の息女が生まれたときからの婚約者

と、鎌倉で聞いておつたが」

「それが近ごろ一変致しまして、是非とも都からお迎えしたいというご意向でございます」

「お局、坊門家がどのような家門かご存知なのか」

安楽房はやや威丈高になつた。後白河法皇に近仕した中原師広の地肌がむき出しになつた恰好でもある。

「はい、名門中の名門でいらっしやいます」

「將軍頼家公ですら比企氏という源家の乳母の一族から御台所を迎えたものではありませんか。それが將軍でもない千幡君に坊門家の息女を望まれるなど……」

このとき阿波ノ局は甚だ重大な言葉を洩らした。

「千幡君さまは、じきに將軍家になられるお方でございます」
(つづく)

新会員のご紹介を広くお願い申し上げます。お知り合いの人やお檀家の皆様に呼びかけて、一人でも多くの読者をご勧誘下されますれば、幸いです。どうぞくれぐれも宜しくお願いいたします。

法然上人鑽仰会

二 編集後記 二

○「友人が自分より大きいこと、実物より大きいことを期待してはいけない。彼らにありのままに凡庸なるものとしてうけいれ、彼らを友に持てることをよろこべ。ともに飲み、ともに笑い、金の貸し借りをしようと思つたら、自分が彼らにそうのぞむように、自分も彼らの特別の女に手出しをせぬこと、そして、わけてもいちどあたえた約束をけつして破らぬこと。／それが友人にたいして負う義理のすべてであり、期待していいすべてである」(ウィリアム・アイリッシュ、村上博基訳「ニューヨーク・ブルース」より)——灯火に親しみながら、秋の深まり行くもの静かな一宵、*「読書の秋」*と洒落れ込んで、開いたものの本はアイリッシュの短篇集。その一ページにふと見出したこの一文は、息づまるサスペンスのシリアスな世界を離れて、私の心を早鐘のよりに打ち鳴らした。もう私自身、恋人や親

友に毎日のように会って手間ひまをつぶして暮らしていた時代とは、大分に違つてしまつたが、秋思に心を漂よわせていささかセンチメンタルになつた想いは、かつて知り合い、今も付き合つてゐるなつかしい人たちに馳せて行く。そしてそうした人々との交誼に、このアイリッシュの言葉の含蓄は深い。ふけ行く秋の夜長を書齋に過した私の明日は、あくまでも約束と義務とを果たす人でなくてはならない。果たして、それができるかどうか……。

火美し酒美しやあたためむ

青邨

友と交す心も熱き温め酒

ゆう一

○さて、十月はまたお十夜の月でもあるが、各寺院で営まれる念仏法会はさぞ賑やかであらう。かつてこの欄においても、「人々の邪心のない素直な念仏合掌の心を、阿弥陀仏は月の光のやさしさのようにあまねく救い取つてやまないのである」と書いたが、念仏の日暮しをいたす私たちにとって、信仰を深める恰好の修養の月である。

「浄土」購読規定

会費一カ年 金二、〇〇〇円

(送料不要)

浄土 四十四巻 十月号

昭和十年五月二日
第三種郵便物認可

昭和五十三年 九月二十五日 印刷
昭和五十三年 十月 一日 発行

編集人 宮林 昭彦

発行人 佐藤 密雄

印刷人 関 二三男

印刷所 長谷川印刷所

東京都千代田区飯田橋一―十一―六

発行所 法然上人鑽仰会

電話東京二六二局五九四四番

〒二〇三 振替東京八一八二一八七番

＝新装復刊＝

『善導和尚集』

A 5 判 474頁 定価7000円 (送料実費)

◎昭和55年に、善導大師の千三百年ご遠忌を迎えるに際して、時宜を得て、装いも一新して復刊された大書。「五部九巻」といわれた善導著作の全集成とともに、解題、索引等を附した旧版の復刻作業である。豪華函入れの本書を広く推薦したい。

発行 浄土宗宗務庁

発売 山喜房仏書林 〒 113

東京都文京区本郷5-28-44

振替 (東京) 0-1900

＝好評発売中＝

大正大学教授 竹中信常著

『タ ブ ー の 研 究』

—文部省科学研究費助成出版—

A 5 判 450頁 定価8,500円 (送料実費)

『宗 教 学 序 説』

A 5 判 474頁 定価6,500円 (送料実費)

◎宗教学界の権威である著者が、最新刊の『宗教学序説』を新たに上梓して、その永年の研究成果を発表されたもの。専門的な詳細な研究書ではあるが、宗教に関心を寄せる多くの人に広く推薦したい。

発行 山喜房仏書林 〒 113

東京都文京区本郷5-28-44

振替 (東京) 0-1900